

地域の底力——小坂町

か づ の こ さ か ま ち
秋田県鹿角郡小坂町

「あるもの」を徹底的に生かした 美しきエコタウン・小坂町を訪ねて

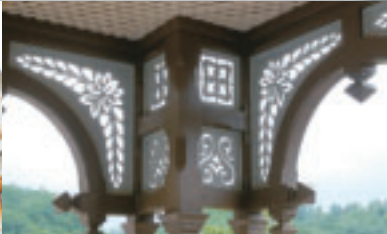
青森県との県境に近く、十和田湖を抱く小坂町。
かつて小坂鉱山お膝元の町として栄えたが、
時代の変化の中で衰退するばかりだった。
だがこの町は力強い転生を果たした。
鉱山のリサイクル技術や産業遺産を生かした町づくりは
世界の鉱山町からも熱い注目を集めている。

取材・文 千葉 望 写真 栗原克己
協力 松竹株式会社

小坂町の中心部に建てられた明治時代の建築「康楽館」。芝居小屋として現役で、今も毎日のようにさまざまな公演が開かれている。



小坂町の象徴のひとつ、旧小坂鉦山事務所。建築技術の冴えを見せる見事な出来栄だ。町に寄付され、22億円の資金をかけて移築されたことで、観光資源として蘇った。



アカシアと 花畑の町・小坂

東北新幹線を盛岡駅で降り、高速バスに乗り換えて秋田県に向かう。奥羽山脈越えとなる道筋には、ブナやナラなど木々が豊かに生い茂り、北東北独特の高く澄んだ空が美しい。

一時間半ほどで、目指す小坂町に入った。この辺りから景色が変わり、生えている樹木の多くがアカシアに変わる。街路樹によく使

われるアカシアがこれほどたくさん生えている光景は珍しい。

小坂高校前のバス停で、前町長の川口博氏が待っていてくれた。川口氏はこの春まで五期小坂町長を務め、小坂町を「環境と観光の町」に脱皮させたキーパーソンである。川口氏の車で、町内を案内してもらった。

「ここは以前、小坂鉦山から明治三十五（一九〇二）年、昭和四十二（一九六七）年の間排出されていた亜硫酸ガスによって、木々が枯れてしまったんです。山



これも旧鉦山の建物。窓の形には「藤田組」の社章が使われている。

に緑を再生させるため、三〇〇万本のアカシアを植えました」
西洋風に美しく整備されているメインストリートに入った。「明治百年通り」である。ここでもアカシアの並木が心地よい影を作り、草花が植えられた花壇は手入れが行き届いていた。街灯にも花の鉢を取り付けられ、通り全体が花畑のよう。アカシアが開花する六月は、白やピンクの花が良い香りを漂わせ、一年で一番町が綺麗になるといふ。道路のすぐ横に澄んだ小川が流れ、小さなヤマメの泳ぐ姿が見えた。かつて鉦害で汚れ果てた町だったとは思えない。



康楽館前の通りには「康楽館」と染め抜かれた幟がはためき、全国から来る観光客を歓迎する。

世界の鉦山町に 学んだ町づくり

西洋風と感ずるのは、広場の一角に建っている見事な洋館があるためだ。当時、小坂鉦山事務所として使われていたもので、国の重要文化財に指定された優雅な建物である。この建物を生かすように、通り全体がデザインされている。川口氏が胸を張る。

「この建物を移築するには二億円のお金がかかりました。が、思い切ったことで、今では町の財産になっています」

明治政府は小坂に鉦山が発見されると、明治十七（一八八四）年

小坂町を蘇らせたキーパーソンの一人、前町長の川口博氏。全国から講演に招かれる。



に鉱工業振興のためにと大阪の藤田組（のちの同和鉱業・現DOW Aホールディングス）に払い下げた。金・銀・銅・鉛などの豊富な鉱脈を持ち、明治四十（一九〇七）年には鉱産額で日本一を記録。鉱山の活況とともに会社の売り上げも増え、最盛期には秋田県の年間予算の八倍もの売り上げを上げていたという。

小坂町には鉱山関係者が多数集まって暮らすようになった。水力による自家発電や水道の敷設などライフラインがいち早く整備され、従業員の福利厚生も非常に手厚いものだった。

その一例が旧鉱山事務所とともに町のシンボルとなっている芝居小屋「康楽館」である。今では町に寄付されている。「明治百年通り」沿いに建つ古い木造の芝居小屋は、旧鉱山事務所と様式は違いますがやはり洋風建築で、ペンキ塗りの色合いが懐かしい。その日は「松竹大歌舞伎」の一行が三日間の公演を行う前日に当たっていたため、「康楽館」の前には役者の名前を染め抜いた色とりどりの幟（のぼり）がはためいていて、にぎやかそのものである。



川口氏は、美しく整えられた街並みを見やり、「町づくりにあたっては、いろいろな人や地域から学びました。特に鉱山町だった地域の視察は勉強

になりました」と話す。川口氏が町長に就任した平成二（一九九〇）年には、すでに小坂鉱山は閉山しており、町は衰退の一途をたどっていた。町の再生と発展のために何をすべきか。真剣に考えざるを得ない時期だったという。

「カナダのバンクーバー近くにビクトリアという町があります。その中にブッチヤートガーデンという花園があるので、ここも昔は鉱山だったんですよ。二〇ヘクタールもある露天掘り跡地をすべて花畑にして、すっかり人気の観光地となりました。見習って小坂町も通りを花畑にしようと考え、町民の皆さんに協力していただきました」



和洋折衷の建築が懐かしい芝居小屋「康楽館」。ちょうど「松竹大歌舞伎」の公演が行われ、ひいき筋から贈られた役者名の幟や積まれた酒の四斗樽で華やいていた。





緑の山間を行くと小坂製錬の巨大プラントが現れる。ここで世界最先端の技術を生かして、リサイクル原料からレアメタルが抽出されているのだ。



ある人は資金を、ある人はボランティアで労働を提供。生半可な手入れでは到底維持できない美しさは、町民の手によって保たれていたのである。

「黒鉱」製錬で培ったリサイクル技術

「明治百年通り」を過ぎて間もなく、今度はまったく違った光景が見えてきた。巨大なプラントと、いかにも古めかしい赤レンガの工

場群である。ここがかつて隆盛を誇った小坂鉦山の現在の姿である。

町おこし、地域再生の掛け声は日本全国、どこへ行っても高くなる一方である。だがそこで重要なのは、自分たちの町をどのように変えていくのかというブランドデザインをリーダーとしてブランドデザインを構築する努力を長い間続けてきた。

「小坂鉦山にとってはプラザ合

意がとどめでした。円が二倍に上がってしまったのは価格の点で各国の鉦山に太刀打ちできない。いくらリストラを繰り返しても追いつかず、とうとう閉山に追い込まれたんです」

その後はDOWAホールディングスとしても、小坂町としても、生き残りをかけた模索が続いた。そして、再生の柱となったのが、「リサイクル」と「環境」、そして「観光」だった。

「私は農家の生まれですから、以前から自給自足の生活、ものを分かち合う生活をすべきだと考えていました。町長になったときから、小坂町を循環型社会のモデルになるような町にしたいと考え続けてきたのです」

転機となったのは九七年十月に開かれた「世界鉦山サミット」である。鉦山を持つ町はどこも時代の波に洗われ、苦しんでいた。危機感を共有する世界三〇カ国から鉦山町の関係者が小坂に集まり、さまざまな議論が行われた。この場で小坂町は「先端鉦業技術を資源リサイクル技術に」「美しい地球を未来に残す循環型社会の構

築」「環境保全と有効活用によって自然とともに生きる地域振興」というスローガンを掲げた。

このうち「資源リサイクル」の点について語ってくれたのは、小坂製錬株式会社の総務部長・矢内康晴氏である。矢内部長が同和鉦業時代のDOWAホールディングスに入社したのは八五（昭和六十）年。プラザ合意の年だった。

「入社してすぐ小坂の事務所に配属されました。私が入社した年はもう赤字（笑）。労働組合の総会を『康楽館』でやった記憶があります。当時はそんなことにしか使われませんでした」

経済のグローバル化が進む中、生き残りに努力しなければならぬ。ここで生きたのが、小坂鉦山の「黒鉱」を製錬することによって蓄積してきた技術だった。「黒鉱」は普通の銅・鉛と比べると金、銀の割合が高い。そのほかにも亜鉛や鉛、さらに貴重なレアメタルがたくさん含まれている。だがそれらは銅の製錬にとってはあくまでも「不純物」。小坂製錬の歴史は、いろいろある不純物である金属を取り出す戦いの歴史でもあったの

「今はこの技術が当社の核となっています」

「都市鉱山」という言葉を聞いたことがあるだろうか？ 地中から鉱石を掘り出すよりも、もっと効率の良い鉱山が人口密集地帯の都市にあるというのだ。

「それは携帯電話とかパソコン、ゲーム機、小型オーディオプレーヤーなどの基板類です。この中には金や銀、銅、鉛のほかに貴重なレアメタルがたくさん使われています。日本はレアメタルのほとんどを輸入に頼っていますし、最近では産出国も輸出に慎重になっています。特にここは山間部にあつて、輸入してきた材料を運ぶにもコストが掛かります。それなら、日本にあるリサイクル原料を回収して、かつて『黒鉱』でやってきたように取り出せば良いわけです」



小坂製錬の矢内康晴総務部長が立っているのは携帯電話などから取り出されたりサイクル原料の山。下は金の延べ棒。

数年前、日本が使わなくなった携帯電話やパソコンなどの廃棄物をごみとして中国などに「輸出」して問題になっていると話題になった。もちろんそれもリサイクルに回されるのだが、問題は不要部分がそのまま廃棄されてしまったため、有害な水銀などが土地や水を汚染すること。環境を汚染しないかたちでリサイクルできる小坂製錬の技術レベルは、現在、世界でもトップクラスである。

リサイクル原料を集めた場所に案内してもらった。そこには金属くずとも見える材料が山積みになっている。一方、取り出された金属の方は整然と積み上げられ、出荷を待っていた。

リサイクルによって生まれた立派な金の延べ棒を見せてもらった。ここでは一日に二本の金の延べ棒が作られている。一本一三キ

ログラムで、金額にして四〇〇〇万円分。力を入れる価値は十分ある。

かつては衰退産業の代表格のように言われていた鉱業が、技術を生かせば先端産業に転換できるところとを、小坂製錬が示しているのである。DOWAグループ傘下には小坂製錬のほかにもたくさん環境関連企業があり、今では日本有数の環境ビジネスグループを形成している。

環境と文化の町づくりが次の目標

鉱山が衰退した、しかしそれが二十一世紀型の環境ビジネスとして生まれ変わった。それは、小坂町にとつてもめざましい実績である。だが川口氏はそれに満足せず、町そのものをエコタウンにする取り組みも進めた。生ごみを回収して堆肥化したり、廃食用油を回収する。さらに、使われていない田に菜の花を植え、菜種油を搾ってそれを調理に使い、廃油は加工して農機具の燃料にするなど、さまざまな工夫が続けられている。

平成二十年にはシンポジウムが開催された。DOWAホールディングスの吉川廣和会長や国際日本文化研究センターの安田喜憲教授、横浜国立大学の宮脇昭教授などが小坂町に集い、将来の方向性について議論し合った。その結果、「環境と文化が調和したまちづくり」という新たな方向性が打ち出された。

「宮脇先生は森作りの専門家です。先生は本来の森とはその地域原産の木を混植することで作られ



小坂町内にある秋田県側の十和田湖の景観。秋は紅葉で真っ赤に染まる。

「康楽館」で働く沢田直紀氏。「就職したのは高校の先生の紹介」と言いながら、地元が誇る芝居小屋で働く喜びを語ってくれた。「康楽館」の平土間は珍しい前傾型。後方の席からも前がよく見える。



栈敷席も前傾している珍しい設計。建築に興味がある人なら天井の木組みやクラシックな照明にも注目だ。舞台の下には人力で動かす廻り舞台の仕掛けが。4人で回す仕組みという。

るといふ理論の持ち主。その点ではアカシアを三〇〇万本も植えたやり方は間違っていたということになります（笑）。そこで今、先生のご指導のもと、次代の森作りのための植樹に取り組んでいます」

小坂町には秋田県側の十和田湖という重要な観光資源があるが、

早くから観光開発が進んだ青森県側と違って、開発に後れを取った。「鉾山があるのだから観光など：」という理由である。だが自然の景観が保たれたままの静かな環境は、今となつては大きな売り物である。湖畔には、戦前に北東北の宮大工を集めて建てられたどっしりとした「十和田ホテル」があり、観光客のほか、世界からの訪問客を迎え入れている。

ないものを数えず あるものを生かす

翌日から始まる大歌舞伎の公演準備に忙しい「康楽館」に入ってきた。そこには館長の木村則彦氏

（小坂町役場観光商工班）、職員の沢田直紀氏、そして「康楽館友の会」会長の小原茂氏が待っていてくれた。外から見ると洋風の建物も、中に入ってしまうと日本の伝統的な芝居小屋そのものである。裏方を務める沢田氏が舞台裏を案内してくれた。花道の下に「すっぽん」と呼ばれる仕掛けがある。ここに役者を載せてせり上がる趣向である。「すっぽん」から出てくる役柄は幽霊とかキツネなど「人外のもの」。

「芝居の時はそうですが、町内のカラオケ大会だと、ここからマイクを持って登場する方がいらっしやいます（笑）」

舞台下の奈落には、人間が4人で回す「廻り舞台」の仕掛けがある。手と肩を当て、舞台を回すための四本の木の棒は、汗と手の脂が染み込んで餡色に光っていた。今の劇場の廻り舞台はすべて電気仕掛けである。

花道に立ってみると、劇場の平土間は前に向かって傾斜していた。座布団の上に座っていても、後ろの席から舞台がよく見えるようにという配慮である。こういう

ところが江戸時代から続く芝居小屋よりも近代的である。

小原会長はもともと小坂町の郵便局長を務め、町のことは何でも知っている人。

「私が子供のころは、学校の学芸会もここでやっていました」

とのこと。映画館として使われることも多く、大正時代には無声映画も上映されていた。このほか津軽三味線、地方巡業の芝居、少女歌劇団、浪曲や落語とたくさんの出し物が行われた。今も毎日のようにさまざまな公演が掛けられる。

「ふつうは重要文化財に指定されると、傷がつかないようにと大切に扱って使わない。でも役者さ

右が半纏の似合う「康楽館」館長の木村則彦氏、左は「康楽館友の会」会長の小原茂氏。



古い芝居小屋の魅力を語る二代目中村吉右衛門丈（屋号・播磨屋）。『康楽館』の楽屋は大柄な吉右衛門丈には少し狭いが、伝統的な空間に身を置く丈の姿は風格にあふれる。歌舞伎界を代表する名優で重厚な役柄を得意とする。日本芸術院会員。



んたちは皆さん、『こういう芝居小屋だけに、使わないのは惜しい』とおっしゃいます」

「康楽館」の魅力は、役者との距離の近さだろう。すぐそばを役者が通っていくので、衣装がよく見えるし、おしろいの匂いが漂い、流れる汗も見える。木村館長が証言する。

「以前市川團十郎さんがいらしたときは、あまりの暑さに大汗をかいていらしたので、お客さんがあおいであげていました」

町に寄付されなければ、こんな魅力的な建物もおそらくは解体されていただろう。

舞台裏を見学した翌日には、いよいよ歌舞伎の本公演が行われ

た。中村吉右衛門丈が率いる一座で、出し物は「沼津」と「奴道成寺」。演出上両花道（舞台に向かつて左右に二本の花道があること）を役者が通るため、すぐ近くを行く吉右衛門丈の息遣いまでよく聞こえた。満員の観客席は役者の芝居に一喜一憂し、笑い、時には涙を流した。

「沼津」の後、楽屋に吉右衛門丈を訪ねた。

「昔の方は音響など考えていないと思われがちですけれども、こういう古い芝居小屋では実はとてもよく考えられていることが多いですね。大劇場とは大きさが違いますので、多少声の張り方などは調整いたしますけれども、あとは

同じようにやらせていただいております。両花道を歩いてお客様の中に入っていきますので、役者を身近に感じていただけて、とても喜ばれる演出ですね」

吉右衛門丈が康楽館を初めて訪れた際には、歓迎セレモニーが催されるなど町民との触れ合いの機会もあったそうだ。こんな雰囲気を楽しみたくて、「康楽館」の公演には全国からファンがやってくる。川口氏は言う。

「地方はないものを数えていて

はいけない。今あるものを生かして、独自の町づくりをすることが大事です。小坂町はその方法で、ある程度成功できたのです」

鉾山遺跡があり、魅力的な建物があったからできたこと、と言っではいけない。そういう貴重な財産を惜しげもなく捨ててきたところはいくらかもある。小坂町には強力なランドデザインがあり、それを推進する情熱があった。その成果が、現在の調和のとれた町の姿である。



舞台や花道と観客席との距離が近く、役者と観客が一体になって芝居を盛り上げるところに「康楽館」の魅力がある。観客は熱演に一喜一憂し、涙を流し、熱い拍手を送っていた。